

そして次の如き結果が得られた。Ⅰ型では1例を除いて全て4。Ⅱ型では1と4が用いられているが、1の形式を取るのは次の場合である。才一名詞がanastasisの如く独立的使用の場合も常に冠詞を取る名詞。或は才二名詞が tou huiou tou anthrōpou, tou patros mou, tōn patrōn humōn の如く adnominal用法以外でも冠詞の名詞に対する密着度が強い場合。例えば, ho huios tou anthrōpou <人の子>はマタイ伝に24例, ルカ伝に23例見出されるが無冠詞形式即ちhuios anthrōpou 或はho huios anthrōpou は皆無である。

これらの条件が無い時は4となる。

Ⅲ型でもto haima tēs diathékēs to peri pollōn の如く才一名詞の冠詞の密着度が強い場合は1であるがそれ以外は全て4となる。

Ⅳ型では大部分が1即ち両方共冠詞が用いられる傾向が強い。但しその属格が「素材・内容」の概念を表わす時4が殆んど例外なく用いられる。

以上の事より抽象名詞はここでは自身、無冠詞となるのみならず、それが修飾する名詞も無冠詞とする。即ち同化現象の働きが明瞭に感じられる。逆に具象名詞は今迄述べて来たような冠詞をとる条件、例えば唯一物、前方照応、対比的使用等の条件がない場合でも冠詞を取る傾向が強いと言える。
(文責 本人)

国語審議会の諸問題

関 谷 孝 英

。ねらい

言葉は国民だれもが関わる重要な対象であり、さらにいえば文化の源泉たりえるものである。このテーマの追求により、国民のためのことばの方向を、提示する。

。論文の構成

Ⅰ 国語審議会の歴史

審議会の特に関後にやりとげた仕事(成果)を羅列。

Ⅱ 国字論争の一般的動向

漢字、仮名の起源から、現在にいたる国字論争の概観をみる。

Ⅲ 対立点の諸問題

国語審議会があきらかに分裂していることを国民にさらけ出した昭和三十六年を主体とした、新聞紙上にみられる立場と意見の相違を明らかにする。

Ⅳ 国字問題の国語学的、政策的視点

それぞれの立場を代表するといわれる松坂忠則氏と福田恒存氏の意見を中心として考察し僕の結論らしきものを加えることにする。

● 参 考 資 料

- 朝日新聞 昭・24.1～41.1
- 毎日新聞 昭・41.1
- 言語生活（楽摩書房） 40.2 39.2 37.2 36.5 35.2 35.1 31.12
31.9 30.9
- 外国における国語の問題（国語シリーズ 47、文部省）
- 国語問題解答オ一集～オ七集（光風社）
- 私の国語教室（福田恒存著 新潮社）
- 国語国字論争（松坂忠則著 新興出版KK）
- 「潮」 昭・41.2月号（潮出版社）
- 日本語の歴史（土井忠生編 至文堂）
- 国語学概論（橋本進吉著 岩波書店）
- 国語学史（時枝誠記著 岩波書店）
- 国語と国字（大月書店）
- 言葉と生活（西尾実著 毎日新聞社）

（文責 宮本邦彦）

分詞について

—— 進行形の用法、意味とその発達過程に ついての研究——

手 島 稔 之

この論文の構成は、序論、本論、結論の3つから成る。

I 序 論

この論文で取りあげるのは動詞的形態に発達した進行形で、その用法、意味、形態の現代まで